

# 中古仮名文における「やうなり」の意味用法をめぐって

森 脇 茂 秀

## 一、はじめに

稿者は、これまでに所謂比況表現の史的変遷過程を明らかにするために「似る」「ごとし」等について考察したが、本稿においては、平安仮名文学に表れる「やうなり」について考察を行う。

今回取り上げる「やうなり」については、出現に文体的な偏りがあり、「専ら仮名文に表れる。「中古から中世にかけての語。特に、中古では、漢文訓読文系の文章に用いられた「ごとし」に対して、「やうなり」は和文で多く用いられた」(『大辞林』)という指摘は、周知の事実であるが、意味用法の面からは、「ごとし」と共に記述されることが多く、「やうなり」は「ごとし」と同じ意味を表す」(『日本文法大辞典』)等と、簡単な記述に

止まることが多い。

一方、「やうなり」(「ようだ」)の語構成として、「源的には名詞「よう」に断定「だ」の付いたもの。「よう」(様)は「ありさま」。そのようなありさまである」の意だが、視覚的なものに限らず、広く感覚・知覚でとらえられる事柄一般に使用される。『基礎日本語辞典』のように、「やう」(様) + 指定「なり」(だ)が、一般的な解釈であるが、接尾語「やく」の自立語化(接尾語「やく」に副詞語尾「く」が付いた)による「和語」出自説もある<sup>1)</sup>。但し、後者の説においても、漢語「様」の影響下にあつたことを指摘しており、一方で「やうなり」は、「やう」の独立性が高く、この点、語幹「ごと」の単独用法が見られる「ごとし」と近似の性質を有する、と考えられる。

また、本稿においては、考察対象に「やうなり」の「終止形」を中心に取り上げようと思う。「終止形」に限定したのは、その特質を明らかにする場合、終止形「やうなり」と例えば連用形「やうに」とをそれぞれ個別に考察し、それらの結果を踏まえて相互の関連を検討する必要性を感じているからである。したがって、今回は「やうに」「やうなる」等を考察対象としていない<sup>(注2)</sup>。

以下、本稿においては「やうなり」の承接を重視し、用例に即して意味用法を分析する。

## 二、承接からみた「やうなり」(『源氏物語』以前)

### 二一、「形容詞連体形・やうなり」

〔用例1〕かくてその男ども、年・齢・顔かたち・人のほど、たゞ同じばかりなむありける。心ざしのまさらむにこそはあはめとおもふに、心ざしの程だに、たゞ同じやうなり。暮るればもろともに来あひぬ。物おこすれば、たゞ同じやうにおこす。いづれまされりといふべくもあらず。

(「大和物語」 百四十七段)

〔用例2〕おぼろけにおもふことおほかれど、かくわりなきに、物おぼえずなりにたるべし、なにことも申さで、あけぬといへど、雨なほおなじやうなり。

(「蜻蛉日記」 中 天禄二年七月 246頁)

〔用例3〕さて、例のもの思ひは、この月も時々おなじやうなり。

(「蜻蛉日記」 下 天延元年五月 290頁)

〔用例4〕「いかに」と問はせ給ふに、御文をさし出でたれば、御覽じて

おなじ枝に鳴きつゝをりしほとゝぎす声はかはらぬものと知らずや

と書ゝせ給ひて、たまふとて(宮)「かゝること、ゆめ人に言ふな。すぎがましきやうなり」とて入らせたまひぬ。

(「和泉式部日記」 400頁)

〔用例1〕は「地の文」の用例で、二人の男に求婚された女が「愛情のまさっているほうの人と結婚しよう」と

思ったが、愛情の程度もまったくおなじありさまである」と解釈される場面である。「やうなり」の上接語は形容詞「おなじ」であり、「やうなり」は、「ありさま」を表している。この「やう」は「目に見える状態」や「外見の姿」を表しているが、ここでは「心ざしの程だに」とあり、「心情を含めたことから（ありさま）」が「やう」と捉えることができるであろう。

〔用例2〕も「やうなり」の上接語は形容詞「おなじ」で、「雨はまだひどく降りつづいている」と解釈される場面である。ここでは「雨（のふり方）」が「おなじやうなり」であり、「やう」は「目に見える状態」を表していると考えられる。

〔用例3〕も「やうなり」の上接語は形容詞「おなじ」であり、「例によってあの人の来てくれないための物思いは、この月も変わりがない」と解釈される場面であるが、ここでは「もの思ひ」が「おなじやうなり」であり、「心情を含めたことから（ありさま）」と捉えられる。

〔用例4〕は「会話文」中の用例で、「亡き兄宮と声は変わらぬ」と返歌を書き、それを童に託すときに、「このよ

うなことを決して人に言うな。好色に見える」と宮の発言中に「やうなり」が表れている。ここでも「すぎがましきやうなり」が「心情を含めたことから（ありさま）」を表していると考えられるが、ここでは、他の人からそのように見える、という、他から「推量される様子」を表している、と捉えることができよう。

## 二二二、「形容動詞連体形・やうなり」

〔用例5〕「御文ありつるは、はやおちにけり」といへば、おろかなるやうなり、「かへりごと、せぬにてあらん」とて、何事ともえ知らでやみぬ。

〔蜻蛉日記〕下 天延元年 293頁

〔用例5〕は、「地の文」の「やうなり」の用例で、「やうなり」の上接語は所謂形容動詞「おろかなり」である。『全集』「頭注」には、「使いが手紙をぞんざいに扱ったようだ、そんな手紙には返事などしないでおこう、の意。作者の心中思惟だが、かつそういうわけで返事は出さな

かつたという結果をも含めて表現」とある。ここでは「御文ありつるは、はやおちにけり」(手紙があつたが落としてしまつた)が「おろかなるやうなり」であり、「なうなり」は、そのことに込められた「事情、子細」を表している、と考えられるが、同時にこの用例は、ぞんざいに扱つた「推量される様子」を表している、とも考えられる。

### 二一三、「動詞連体形・やうなり」

〔用例6〕この歌どもを人の何かといふを、ある人きふけりてよめり。その歌、よめる文字、みそ文字あまりななもじ。人みな、えあらでわらふやうなり。歌主、いと気色悪しくて、ゑす。

(「土佐日記」一月十八日)

〔用例7〕かゝる世に、中将にや、三位にやなど、よろこびをしきりたる人は、「略」とて、渡して、乗物なきほどに、はひ渡るほどなれば、人はおもふやうなりと思ふべかめり。霜月なかのほどなり。

(「蜻蛉日記」上 康保四年十一月 160頁)  
〔用例8〕(略)端に「さても

(女)君をおきていづちゆくらんわれだにもうき世の中にしひてこそふれ

とあれば、(宮)「思ふやうなり」と聞こえんも見知りかほなり。あまりぞおしはかりすぐい給ふ、うき世のなかと待るは。

うちすてて旅ゆく人はさもあらばあれまたなきものと  
君し思はば

ありぬべくなん」との給へり。

(「和泉式部日記」 422頁)

〔用例6〕は「土佐日記」の用例で、『新大系』当該箇所には、「黙つておれず笑い出すような始末だ。婉曲」と注があり、ここでの「やうなり」を「婉曲用法」と捉えていることが分かるが、ここでは「人みな、わらふやうなり」とあり、「やう」は、「(心情を含めた) ことから(ありさま)」、「目に見える状態」を表していると考えられる。(注)

〔用例7〕は、兼家の昇進に併せて、乗物が不要な程の

近くの家に移った作者に対して、「世間の人はわたしがいかにも満足げだと思っていることであろう」と解釈される場面である。ここでも「人」が「おもふやうなり」と「蜻蛉日記」の作者が推量しているのであるが、「やうなり」は「心情を含めたことから（ありさま）」を表していると考えられ、他の人からそのように見える、という「推量される様子」を表している、と捉えることができる。

〔用例8〕は、「和泉式部日記」「会話文」中の用例で、宮が女に和歌の代詠を依頼する場面である。ここで依頼した歌の出来映えが、私が「おもふやうなり」、即ち「理想的である」と解釈できるが、ここでの「やうなり」は、表出された和歌が「思う通り」の「ありさま」を表している、と考えられる。

## 二一四、「たる・やうなり」

〔用例9〕これを、「いまこれより」といひたれば、痴れたるやうなりや、かくぞある。

〔蜻蛉日記〕 上 天曆八年夏 111頁

〔用例10〕例も清げなる人の、ねりそしたる着て、なよ、かなる直衣、太刀ひき佩き、例のことなれど、赤色の扇すこし乱れたるをもてまさぐりて、風はやきほどに、纒吹きあげられつゝ立てるさま、絵にかきたるやうなり。

〔蜻蛉日記〕 下 天延二年四月 302頁

〔用例11〕山の端、錦（にしき）をひろげたるやうなり。たぎりて流れゆく水、水晶を散らすやうにわかかへるなど、いづれにもすぐれたり。詣で着きて、僧坊にいきつきたるほど、かきしぐれたる紅葉の、たぐひなくぞ見ゆるや。

〔更級日記〕 525頁

〔用例9〕は、「蜻蛉日記」の用例で、兼家から手紙を何度ももらい「返事を待ちきれずに、まるで正常さを失つたみたい」と解釈される場面である。『全集』頭注には「挿入句。兼家は返事が待ちきれなくて、つづけて「人知れず」の歌をよこす。結婚後まったく違つてしまつた兼家を知っている作者から見れば、そのときのかれはまるで

正常な理性を失ったとしか思えない。執筆時における批判を挿入したもの」とある。ここでの「やうなり」は「たり」と承接しているが、「まるで正常さを失ったみたい」という「比況表現」である、と考えられる。

〔用例10〕も「蜻蛉日記」の用例で、右馬頭の容姿について触れられている場面であるが、「冠の纓を吹きあげられながら立っているさま(様子)は、まるで絵にかいたように美しい」と解釈できる。ここでは、「さま」が「様子」を表しており、その後で後接している「たるやうなり」は、「まるで絵にかいたように美しい」という、「比況表現」であると考えられる。

〔用例11〕は、時代が下って「更級日記」の用例である。鞍馬に春に参籠した時よりも、十月ごろに参籠した時の方が趣深く、見映えのするものであった、と述べる場面で「山の端はまるで錦をひろげたようである」と解釈され、ここでも「用例9」「用例10」と同じく「比況表現」であると考えられる。

このように「たるやうなり」形は、「まるで絵にかいたように美しい」などのように「比況表現」用法であ

ると考えられる。

### 三、源氏物語中の「やうなり」

#### 三一、「体言・の・やうなり」

〔用例12〕さやかに見えたまひし夢の後は、院の帝の御ことを心にかけきこえたまひて、いかでかの沈みたまふらん罪救ひたてまつる事をせむ、と思し嘆きけるを、かく歸りたまひては、その御いそぎしたまふ。神無月御八講したまふ。世の人なびき仕うまつること、昔のやうなり。

(落標 二二) 269頁)

〔用例13〕(略) 足摺といふことをして泣くさま、若き子どもどのやうなり。

(蜻蛉(六) 192頁)

〔用例14〕故御方に、下人なれど、久しく仕うまつり馴れて、かの隠れたまへりし御住み処までありし者なりけり、と見なして、いみじく夢のやうなり。主とおぼしき

人は、いとゆかしけれど、見ゆべくも構へず。

(玉鬘 (三) 101頁)

「用例15」年の暮がたには、かからぬ所だに、空のけしき例には似ぬを、荒れぬ日なく降り積む雪にうちながめつつ明かし暮らしたまふ心地、尽きせず夢のやうなり。

(総角 (五) 329頁)

「用例16」同じ所にて見しほどは、いとさがなく、あやにくにおごりて憎かりしかど、母のいとかなしくして、宇治にも時々率ておはせしかば、すこしおよすけしままにかたみに思へりし童心を思ひ出づるにも、夢のやうなり。

(夢浮橋 (六) 374頁)

「用例12」は、故桐壺院の追善の法華八講催す場面で、「世の人々が挙つて」「お仕え申し上げること」、昔と変わるところがない」と解釈される場面である。「やうなり」は「昔の」と承接している。

「用例13」「やうなり」の承接語は「若き子どもの」であり、「泣くさま」が「若き子どものやうなり」であつて、

「年端もいかぬ子供のようである」と解釈できる。

「用例14」「やうなり」の承接語は「夢の」であり、右近が、夕顔の忘れ形見玉鬘にはからずも巡り会う場面で、「まさしく夢のような気持になる」と解釈される場面である。

「用例15」も「やうなり」の承接語は「夢の」であり、「毎日毎日吹き荒れ降り積もる雪の中で、うつろにながめながら明かし暮らしておいでになるお気持ち、いつまでたつてもまるで夢のようである」と解釈される場面である。『全集』頭注には、「大君の死が今だに現実の事とは思われない。雪に降りこめられることで、いつそう別世界にいる気持になる。」とあり、ここでは、「心地」が「夢のやうなり」である。

「用例16」は、「互いに姉、弟と思うようになった子供心を思い出すにつけても、夢のように思われる」と解釈される場面である。『全集』頭注には「簾外に座する弟の姿に回想の中の弟を重ね合わせ、今のわが身の上を思うと夢を見ているような気持。」とある。

「用例17」十月ばかり、月のいみじうあかきを、泣くく

ながめて、  
ひまもなき涙にくもる心にもあかしと見ゆる月の影か  
な

年月は過ぎかはりゆけど、夢のやうなりしほどを思ひい  
づれば、心ちもまどひ、目もかきくらすやうなれば、そ  
のほどの事は、まださだかにもおぼえず。

〔更級日記〕 534頁

〔用例17〕は時代が下がって「更級日記」の「やうなり」  
の連用形の用例であるが、この「夢のやうなり」は「夢  
のように思われた」と解釈できる。ここでは「夫の亡く  
なった当時のことを思い浮かべること」であり、回想の  
中のことがらとなっている。

以上のことから「体言十の十やうなり」形は「比況表  
現」用法であると考えられる。

### 三一、「形容詞連体形・やうなり」

〔用例18〕（明石）「わが心にこそあらめ。辞びきこえむ

を強ひてやは。あぢきな」とおぼゆれど、軽々しきやう  
なりとせめて思ひかへす。

〔薄雲（二） 423頁〕

〔用例19〕彼岸のころほひ渡りたまふ。一たびに、と定  
めさせたまひしかど、騒がしきやうなりとて、中宮はす  
こし延べさせたまふ。

〔少女（三） 74頁〕

〔用例20〕（略）なほ内外の用意多からずいはけなきは、  
らうたきやうなれどうしろめたきやうなりや、と思ひお  
とさる。

〔若菜上（四） 135頁〕

〔用例21〕すこし暇なきやうにもなりたまひにたれど、  
宮の御方には、なほたゆみなく心寄せ仕うまつりたまふ  
こと同じやうなり。

〔浮舟（六） 99頁〕

〔用例22〕この直衣姿を見つくるに、誰ならん、と心騒  
ぎて、おのがさま見えんことも知らず、簀子よりただ来  
に來れば、ふと立ち去りて、誰とも見えじ、すぎずし  
きやうなり、と思ひて隠れたまひぬ。



(蜻蛉(六) 239頁)

〔用例23〕(大納言の君)「(略)かくあやしうて失せたまへること、人に聞かせじ、おどろおどろしくおぞきやうなりとて、いみじく隠しけることどもとや。さてくはしくは聞かせたてまつらぬにやありけん」と聞こゆれば、  
(略)

(蜻蛉(六) 248頁)

〔用例24〕大臣、この北の対の今君を、(内大臣)「いかにせむ、さかしらに迎へゐて来て、人かく譏(そし)るるとて返し送らむもいと軽々しく、もの狂ほしきやうなり。かくて籠(こ)めおきたれば、まことにかしづくべき心あるかと、人の言ひなすなるもねたし。(略)」など思して、女御の君に、(内大臣)「かの人参らせむ。見苦しからむことなどは、老いしらへる女房などして、つつまず言ひ教へさせたまひて御覧ぜよ。若き人々の言ぐさには、な笑はせさせたまひそ。うたてあはつけきやうなり」と、笑ひつつ聞こえたまふ。

(常夏(三) 232, 3頁)

〔用例18〕は明石の君の「心理文」の用例で、源氏が姫君を迎えに来たときに、姫を源氏にお渡しするのも、しないのも自分次第であるが、一度承諾したことを覆すのは、「いまさらそれも軽々しいことだ」と解される。ここの「やうなり」は、「心情を含めたことながら(ありさま)」であると考えられる。

〔用例19〕は「会話文」の用例で、二条院から六条院に移る場面で、「いつせいにとお決めになったけれども、騒がしいことであると思つて、中宮は少し日延べなさる」と解釈される場面である。ここでも「やうなり」は、「心情を含めたことながら(ありさま)」であると考えられる。

〔用例20〕は、柏木が女三の宮への恋慕の情に思い悩む場面で、「女三の宮はかわいらしい有様であるが、頼りにならない」と解釈される場面である。まず「らうたし十やうなり」が前出し、「うしろめたし十やうなり」が続いているが、ここでは両者共「心情を含めたことながら(ありさま)」であると考えられる。

〔用例21〕は、「同じ十やうなり」で、「薫が以前よりは少しお忙しいようにもおなりになったけれども、中の君

には、今もやはり怠りなく心をお寄せしお世話申し上げられるのはこれまでと変わりが無い」と解釈される場面であるが、この「やう」は、「目に見える状態」である。

〔用例22〕は薫の心理文中の用例で、「すきすきし十やうなり」で、「用例4」「すきがまし十やうなり」と同質であり、「誰とも知られぬようにしよう。いかにも好色じみている」と解されるが、ここでの「やうなり」も「心情を含めたことがら(ありさま)」、他の人からそのように見える、という「推量される様子」を表している、と捉えることができる。

〔用例23〕は「会話文」の用例で、「おどろおどろしくおぞき十やうなり」で、「気味が悪く恐ろしいこと」と解することができる。『全集』頭注には、「おぞし」「おぞまし」「おぞし」も同じ)は強情、気丈などの意だが、そうした心意や行為ははた目には激しく恐ろしいことになる」とあり、「心情を含めたことがら(ありさま)」を表していると考えられるが、他の人からそのように見える、という「推量される様子」をも表している、と捉えることができる。

〔用例24〕aは、「ものくるほし十やうなり」で、「用例18」「軽々し」と共起しており、内大臣の心理で、大江の君のことを「人がこうして悪口をいうからといって、送り返すのも全く軽々しいことで気違いじみたしわざというものだ」と解釈でき、ここでの「やうなり」は、「心情を含めたことがら(ありさま)」であると考えられる。

またbは、内大臣が弘徽女御に(大江の君を)若い女房たちの話の種にして笑いにさせないようにして下さいよ。ひどくうわついているようですから」と話しかけている場面であるが、この「あはつけし」は「軽々しい」という意であり、a「軽々し」と同義であると考えられるが、他の人からそのように見えるという「推量される様子」を表している、と捉えることができる。

また、「形容詞」で、「――なし」形の用例も存する。

〔用例25〕音泣きがちに、いとど思し沈みたるは、ただ山人の赤き木の実ひとつを顔に放たぬと見えたまふ、御側目などは、おぼろけの人の見たてまつりゆるすべきにもあらずかし。くはしくは聞こえじ。いとほしう、もの

言ひさがなきやうなり。

(蓬生 (二) 326頁)

〔用例26〕この姫君を、(源氏)「今まで世人もその人も知りきこえぬものげなきやうなり。父宮に知らせきこえてむ」と思ほしなりて、御裳着のこと、人にあまねくはのたまはねど、(略)

(葵 (二) 69頁)

〔用例25〕は、「地の文」の用例で、「さがなし十やうなり」は、「おいたわしくて口さがないことである」と解釈される場面である。ここでの「やうなり」は、「目に見える状態」「心情を含めたことながら(ありさま)」である。

〔用例26〕は、源氏の心中で、「ものげ無し十やうなり」は、「いままで世間の人もどういふ素姓の方とも存じ上げないのは、問題にならないことだ」と解釈される場面である。ここでも「心情を含めたことながら(ありさま)」を表していると考えられる。

三十三、「否定辞・やうなり」

〔用例27〕帝は、院の御遺言たがへず、あはれに思したれど、若うおはしますうちにも、御心なよびたる方に過ぎて、強きところおはしまさぬなるべし、母后、祖父大臣とりどりにしたまふことは、え背かせたまはず、世の政、御心にかなはぬやうなり。

(賢木 (二) 97頁)

〔用例28〕げにいと侮りにくげなるさましたまへれば、さればよと、(女房)「なかなかなる御答へ聞こえておは恥づかしう」などつきしろひて、(女房)「かかる御愁へ聞こしめし知らぬやうなり」と宮に聞こゆれば、(略)

(夕霧 (四) 388頁)

〔用例27〕は「地の文」の用例で、帝は源氏に心寄せてはいるが、若く優しすぎて「世の政はご意見通りにゆかないことである」と解釈される。ここでは帝の心情の「推量した様子」を述べている、と考えられる。

〔用例28〕は、「会話文」の用例で、夕霧が落葉の宮に恋

して取り次ぎを女房に依頼している場面であり、「あんなにお気持を訴えていらつしやいますのに、このままで人の情けがおわかりにならないと思われる」と解される。ここでは、「心情を含めたことから（ありさま）」を表していると考えられるが、源氏からそのように見える、という「推量される様子」をも表している、と捉えることができる。

### 三―四、「たる・やうなり」

〔用例29〕 足を空にて誰も誰もまかでたまひぬれば、除目の夜なりけれど、かくわりなき御さはりなれば、みな事破れたるやうなり。

(葵 (二) 39頁)

〔用例30〕 宮の亮(すけ)をはじめて、さるべき上人ども、祿とりつづきて、童へに賜ふ。鳥には桜の細長、蝶には山吹襲賜はる。かねてしもとりあへたるやうなり。

(胡蝶 (三) 165頁)

〔用例31〕 髪さはらかなるほどに、落ちたるなるべし、

末すこし細りて、色なりとかいふめる、翡翠だちていとをかしげに、糸をよりかけたるやうなり。

(椎本 (五) 210頁)

〔用例32〕 心えがたく思ひて、(時方)「さらば、のどかに参らむ。立ちながらはべるも、いとことそぎたるやうなり。いま、御みづからもおはししません」と言へば、(略)

(蜻蛉 (六) 198頁)

〔用例29〕は「地の文」の用例で、葵の上が急逝し、「除目の夜であつたが、やむをえないご支障なので、まるでことが破算になつてしまつたようである」と解釈できるが、ここでの「たるやうなり」は、「比況表現」である、と考えられる。

〔用例30〕は、語り手のことばで、「前々から用意してあつたかのようである」と解することができるが、『全集』頭注には、「鳥は桜、蝶は山吹を持つているのに合わせて祿の衣装の色を並び与える中宮方の手ぎわの良さをいう。」とある。ここでも「たるやうなり」は、「比況表現」である、と考えられる。

【用例31】は、「地の文」の用例で「髪が糸を縫りかけたようである」と解釈されるが、『全集』頭注には「髪の毛に乱れがなくそろっていて美しいことをいう。」と指摘している。ここでも「たる十やうなり」は「比況表現」である、と考えられる。

【用例32】は、「時方」の「会話文」中の用例で、「立ちながらお話をうかがいますのも、まことに簡潔に述べた感じがする」と解釈できる用例である。ここでは勾宮が浮舟の死を知り時方を遣わして事情を聞いている場面であるが、これまでの「たる十やうなり」と同じく、「比況表現」である、と考えられよう<sup>〔註〕</sup>。

### 三一四、「る・やうなり」

【用例33】何心もなくひき開けて見たまへば、  
(源氏) あやなくも隔てけるかな夜を重ねさすがに馴れしよるの衣を  
と書きすさびたまへるやうなり。

(葵 (二) 64頁)

【用例34】母方などもやむごとなくものしたまひて、筋ことなるべきおぼえなどおはしけるを、時移りて、世の中にはしたなめられたまひける紛れに、なかなかいとなごりなく、御後見などももの恨めしき心々にて、かたがたにつけて世を背き去りつつ、公私に抛りどころなくさし放たれたまへるやうなり。

(橋姫 (五) 109頁)

【用例33】「用例34」「やうなり」の承接している語は、「たまふ」に完了・存続の「り」が接続した「たまへるやうなり」である。これまでの「たる十やうなり」形は、「比況表現」用法であった。

【用例33】は、「る十やうなり」の用例で、源氏が紫の上と新枕をかわした場面の一節であり、源氏が枕元においた和歌を「気持の動くままに書き流したことである」と解釈できる。ここでの「る十やうなり」は、「心情を含めたことから(ありさま)」を表している、と捉えることができる。

【用例34】は、「橋姫」の冒頭部分で、八の宮の境遇につ

いて述べている部分であるが、ここでの「る十やうなり」は、「(八の宮)はすっかり見捨てられておしまいになつたありさまである」と解釈でき、「用例33」と同様であると考えられる。

(「更級日記」 484頁)

「用例38」にしとみといふ所の山、絵よくかきたらむ屏風をたてならべたらむやうなり。

### 三一五、「たら・む・やうなり」

「用例35」やうやう明けゆく空のけしき、ことさらに作り出でたらむやうなり。

(賢木 (二) 81頁)

「用例36」中島の入江の岩蔭にさし寄せて見れば、はかなき石のたたずまひも、ただ絵に描いたらむやうなり。

(胡蝶 (三) 158頁)

「用例37」白き羅に唐の小紋の紅梅の御衣の裾、いと長くしどけなげに引きやられて、御身はいとあらはにて背後のかぎりに着なしたまへるさまは、例のことなれど、いとらうたげに、白くそびやかに柳を削りて作りたらむやうなり。

(若菜上 (四) 337頁)

「用例35」は、「地の文」の用例で、「空のけしきは、特別につくりだしたようである。」と解することができ、「比況表現」であると考えられる。

「用例36」も「地の文」の用例で、六条院の南の御殿では、ゆく春を惜しんで童頭鷓首の船を浮かべ「船を中島の入江の岩陰に漕ぎ寄せてあたりを見ると、さりげない立石の風情もまるで絵に描いてあるかのようである」と解することができ、ここでの「やうなり」も「比況表現」であると考えられる。

「用例37」も「地の文」の用例で、「(薫の姿は)色白で背がすらりとしていて、氣質が白くきめが細かい柳を削つてこしらえたようである」と解釈できる。ここでもやはり「やうなり」は「比況表現」であると考えられる。このように「源氏物語」中では、「たら十む十やうなり」形は「地の文」に出現する。

「用例38」は、時代が下って「更級日記」の用例であるが、やはり「地の文」の用例で、「にしとみ」というところの山は「絵を上手に描いた屏風を並べたようである」と解釈でき、この「たら十む十やうなり」も比況表現であると考えられる。

### 三一六、「動詞連体形・やうなり」

「用例39」(略)玉かとかかやきて、造りわたせる野辺の色を見るに、はた春の山も忘られて、涼しうおもしろく、心もあくがるるやうなり。春秋のあらそひに、昔より秋に心寄する人は数まさりけるを、名だたる春の御前の花園に心寄せし人々、またひき返し移るふ気色、世のありさまに似たり。

(野分(二) 255頁)

「用例40」狩の御衣にやつれたまへりしだに、世に知らぬ心地せしを、まして、さる御心してひきつくるひたまへる御直衣姿、世になくなまめかしう、まばゆき心地すれば、思ひむせべる心の闇も晴るるやうなり。

(松風(二) 400頁)

「用例41」(源氏)「朝臣や、さやうの落葉をだに拾へ。人わろき名の後の世に残らむよりは、同じかざしにて慰めむに、なでふことかあらむ」と、弄じたまふやうなり。

(常夏(三) 218頁)

「用例39」は、「野分」の冒頭部分で「地の文」の用例であり、「心も体を抜け出して浮き立つようである」と解することができ。ここでの「やうなり」は、「比況表現」であると考えられる。また、後接に、「気色」が「ありさま」に「似たり」となっており、ここでは、「やうなり」と対になつて「比況表現」を表していると捉えることができるであろう。

「用例40」も「地の文」の用例で、源氏が明石の君と再会する場面であるが、「源氏の直衣姿は、優美で、まばゆしい心地がするので、姫君のことを思い悲しみにむせび泣いていた明石の君の親愛いにみちた胸の内も晴れるようである」と解することができる。ここでの「やうなり」は、「(心情を含めた)ことながら(ありさま)」と捉える

ことができる。

「用例41」も「地の文」の用例で、源氏の発話を承け「やうなり」が用いられているが、この用例は、源氏が近江の君を引き取って閉口している内大臣に対して痛烈な皮肉を吐く場面の一節であり、「体裁の悪い評判を後々までたてられるよりは、同じ姉妹をもらって満足するのだ」だったら、なんのさしつかえもないとおからかいになる」と解釈できる。ここでの「やうなり」は、「(心情を含めた)ことがら(ありさま)」とも解することができるが、「まるでおからかいになるようだ」と「比況表現」的用法とも捉えることができるように思われる。

#### 四、おわりに

以上、「承接に着眼し」、「やうなり」の意味用法を考察した。

「やうなり」自体については、「地の文」「会話文」「心理文」何れにも出現し、偏り等はないが、「やうなり」

が所謂「比況表現」用法となる場合は、承接する語形が、「体言十の」「たり」「たら十む」「動詞(連体形)」であり、「地の文」の用例に出現するという傾向がある。

また、「やうなり」が「形容詞(連体形)」「形容動詞」「動詞(連体形)」「否定辞」「り」に承接する場合は、「(心情を含めた)ことがら(ありさま)」「目に見える状態」「推量される様子」となること、等が明らかになった。

「やうなり」の中間的用法の位置付けや終止形以外の活用形、史的変遷等については、今後の課題としたい。ご教授賜れば、幸いである。

(尚、本文は「源氏物語」は、小学館『日本古典文学全集』、その他は岩波書店『日本古典文学大系』『新日本古典文学大系』に依った。また、必要に応じ、各種索引、注釈書を利用した。)

#### 【注】

(注1)「やうなり」の和語出自は、山口佳紀(一九六九)



を参照の事。また、「比況」の定義は「比況」とは、ある事物の状況をほかの事物と比べて表現するといふことである」とする永野賢（『古代語現代語助詞助動詞詳説』）に従う。

(注2) 古代語「やうに」について考察する際には、必然として現代語「ように」の意味用法との関連を当然取り上げなければならない。現代語の「ように」については、前田直子（二〇〇六）に詳しい考察がある。

(注3) 近藤明（二〇〇一）は、次のような有益な指摘がある（傍線は稿者）。

「セムヤウナリ」は、源氏物語には二三例あるが、推量系助動詞の重なる「スベカラムヤウナリ」は事情が異なることも予想されるので除外すると、二二例となる。まず留意されるのは、この二二例のほばいずれもが比喩に用いられていると解されることである。これに対して「ム」を伴わない「スルヤウナリ」の方には、「おのづから御心うつるひて、こよ

なく思しなぐさむやうなるも」（桐壺 源氏物語大成二三⑤）のように、比喩ではなく、単に「よする様子である」といつた意に解される例が少なからずある。

(注4) この用例は「会話文」中に用いられており、一方で、そのように見える、という「推量される様子」を表している用法とも捉えることができる。「推量される様子」と「比況表現」との中間の用法と考えることができないか。

#### (参考文献)

- ・ 山口佳紀（一九六九）「平安時代語の源流について」（『人文科学紀要』48（東京大学教養学部）昭和44）
- （後）『古代日本文体史論考』（一九九三）有精堂に所収
- ・ 近藤明（二〇〇一）「セムヤウナリ」と「スルヤウナリ」推量系助動詞の文中用法の一端」（『國文學 解釈と教材の研究 文法への新しい視点』46巻2号 学

燈社)

・森脇茂秀 (二〇〇四) 「動詞「似る」の意味用法について―平安初・中期の仮名文を中心に―」(別府大学国語国文学) 46)

・森脇茂秀 (二〇〇六) 「中古仮名文における漢文訓読語「ごとし」の意味用法について」(語文研究) 100・101)

・森脇茂秀 (二〇〇七) 「静態動詞「似る」の一形式―『源氏物語』の用例を中心に―」(別府大学国語国文学) 49)

・前田直子 (二〇〇六) 『「ように」の意味・用法』(笠間書院)